

生 靈

昔、江戸靈岸島に喜兵衛と云ふ金持ちの瀬戸物店があつた。喜兵衛は六兵衛と云ふ番頭を長く使つてゐた。六兵衛の力で店は繁昌した、——餘り盛大になつて來たので、番頭獨りでは管理して行かれなくなつた。そこで、經驗のある手代を雇ふ事を願つて許された、それから自分の甥を一人よびよせた——以前大阪で瀬戸物商賣を習つた事のある、二十二ばかりの若者であつた。

この甥は甚だ役に立つ助け役であつた、——商賣にかけては經驗のある叔父よりも伶俐であつた。彼の才發はその家の商賣を益々盛んにしたので、喜兵衛は大變喜んだ。しかし雇はれてから七月程して、この若者はひどく病氣になつて、助かりさうには思はれなくなつた。江戸中の名醫も幾人か呼んで診て貰つたが、誰にもその病氣の性質は分らない。誰も藥の處方をするものはない、何か人知れぬ悲しみからこの病氣が起つて居るとしか思はれないと云ふのが、一同の意見であつた。

六兵衛は戀の病かとも思つて見た。そこで甥に云つた、

『お前は未だ大層若いのだから、誰か人知れず思つて居る女でもあつて、それでつまらなく思つて、——或は病氣になる程になつて居るのでないかとわしは考へて居るのだが。もしそれが本當

ならお前の心配事は皆このわしに云ふのが當り前。ここではお前は両親から遠く離れて居るから、わしはお前のためには父親同様、だから何か心配事や悲しい事があれば、わしは何でも父親のしなけりやならないやうな事はお前のためにする覺悟だ。もしお金が要るのならいくらでもわしに云ひなさい、恥かしがらる事はない。わしにはお前の世話はできると思ふ、それに喜兵衛さんもきつと、お前を元氣に達者にするためなら、どんな事でも喜んでして下さると、わしは信じて居る』

病人の若者はこんなに親切に云はれて困つたらしかつた、それで暫く黙つてゐた。が遂に答へた。

『こんな有難いお言葉は、私は決してこの世で忘れる事はできません。しかし私は内々思つて居る女もありません、——どんな女も望んでは居りません。私のこの病氣はお醫者で直る病氣ぢやありません、お金は少しも役に立ちません。實は私はこの家で迫害を受けてゐますので、生きてゐたいとは思はない程です。どこでも——晝でも夜でも、店にゐても、自分の部屋にゐても、獨りの時でも、人中でも、——私はたえず或女のまぼろしにつきまとはれて惱まされてゐます。一晚の休息も得られなくなつてから餘程になります。眼を閉ぢるとすぐにその女のまぼろしが私のどをつかんでしめつけようと致しますから、それで私は少しも眠られません……』

『何故又その事をもつと早くわしに云はなかつたのぢや』六兵衛は尋ねた。

『云つても駄目だと思つたからです』甥は答へた『そのまぼろしは死人の幽霊ぢやございませ

ん。生きて居る人——あなたのよく御存じの人——の憎しみからでたものなんです」

『誰だい』六兵衛は非常に驚いてききただした。

『この家の女主人、喜兵衛様の内儀様です。……あの人は私を殺してしまひたいのです』若者はささやいた。

六兵衛はこの告白を聞いて當惑した。彼は甥の云つた事を少しも疑はなかつた、しかしその生靈の起つて来る理由の見當がつかかなかつた。生靈は失戀または烈しい憎悪から——その生靈の發する本人も知らないのに、——起る事もある。この場合に、何かそこに戀愛關係を想像する事は不可能であつた、——喜兵衛の妻は、五十をもう餘程出てゐた。しかし又一方から見ると、その若者は憎悪を受けるやうな——生靈を招く程憎悪を受けるやうな事を何かしたのであらうか。彼は難の打ち處のない程行儀よく、缺點を見出せぬ程禮儀正しく、それから義務に對して熱心忠實であつた。この難問題は六兵衛を困らせた。しかしよくよく考へたあとで一切の事を喜兵衛に打明けて、調べて貰ふ事に決心した。

喜兵衛は肝をつぶした、しかし四十年の間、六兵衛の言葉を疑ふべき理由は少しでもあつたためしはなかつた。それで直ぐに妻を呼んで、病人の若者の云つた事を同時に告げ、用心深く妻に尋ねた。初めのうちは青くなつて泣いてゐたが、すこしためらつてから、明らかに答へた。

『その新しい手代が云つた生靈の事はどうも本當だと思ひます——實は私は言葉や様子に決して

表すまいと、本當に努めてゐますが、私はどうしてもあれを嫌はずには居られません。御存じの通りあれは商賣が大層上手です、——やる事は何でも大層氣が利いてゐます。それであなたはあれに大した權限——丁稚や召使に對する權力をこの家で與へておやりになつてゐます。ところがこの商賣を相續すべき私達のひとり息子は實にお人よしで、すぐに人にだまされず、それでこの利口な新しい手代が息子をこまかして、この財産を皆横取してしまふかも知れないと長い間考へてゐました。全くあの手代は何時でも、造作なく、又何のぼろも出さないで、この商賣を潰して、息子を破産させる事ができると私は信じます。さう信じて居るものですから、あの男を恐れ憎まずには居られません。死んでくれればよいと何度も何度も思ひました、自分の力で殺せるものならとさへ思ひました。……それは、そんな風に人を憎むのは悪いとは知りながら、その氣持を押へる事ができませんでした。夜も晝も、あの手代を呪つてゐたのです。それで六兵衛に云つた通りのものが見えたとに相違ありません』

『なんと云ふ馬鹿な事だ、そんなに自分で苦しむのは』喜兵衛は叫んだ。『今日まであの手代は悪く思はれるやうな事は、何一つした事はない、それにお前はあの男を残酷にも苦しめてゐた。……ところで、もし外の町で支店を持たせて叔父と二人やる事にしたら、お前はもつとやさしく考へてやる事ができるだらうね』

『顔を見たり、聲を聞いたたりしなければ』妻が答へた、——『もしあなたがあれをこの家から只外へやつてさへ下されば——さうすれば憎しみを押へる事ができませう』

『さうしなさい』喜兵衛は云つた、——『これまでのやうに憎んでゐたのでは、あの男はきつと死ぬ。さうするとお前は恩こそあれ何の仇もない人を殺すやうな大罪を犯した事になる。どの點から見てもあの男はこの上もない立派な手代だ』

それから直ちに喜兵衛は外の町に支店を設ける準備をした、それからこの手代と共に六兵衛をやつて監督させた。その後生靈は若者を惱まなくなつた、若者はやがて健康を回復した。

(田部隆次譯)

Harjo. (Kotto.)